

ペットビジネスの現状と展望①

コンサルティンググループ チーフコンサルタント 坂田 直樹

はじめに

少子化の流れに呼応するように、ペットを飼育する世帯が増えている。テレビ番組ではペット特集が組まれ、ペット関連の雑誌は書店の棚を埋め尽くす中、様々な企業が成長市場であるペット分野に参入し、さながら百花繚乱の様相となりつつある。

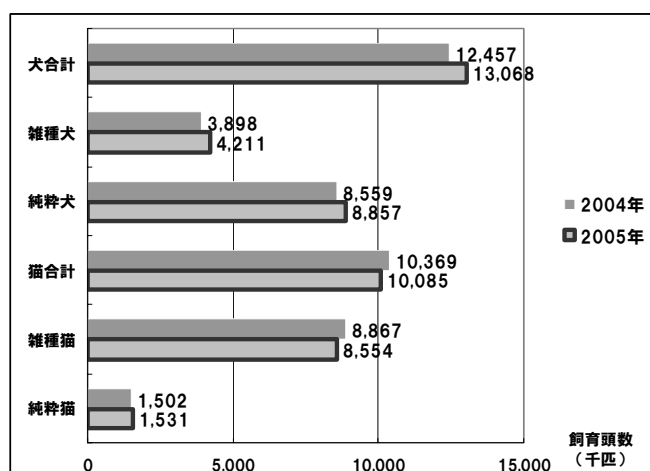
このような背景から、今号と次号の2回に分け、成長産業ウォッチとして、ペットビジネスの現状と展望を記す。

尚、ペットの種類として、エキゾチックアニマル（ヘビ・トカゲなどの爬虫類等）、子供に人気の小動物（ハムスターやモルモット等）、観賞魚など、ペットの対象は様々であるが、本稿では、特段のことわりのない限り、ペットビジネスの主流を占める犬・猫に着目する。

マクロ環境

1. ペットの飼育状況

図表 1. 犬および猫の飼育頭数



出所: ペットフード工業会「犬猫飼育率全国調査」
猫の飼育頭数は室内飼育のみの頭数を記載

現在、ペットの総数は、室内・屋外飼育の合計値で、犬 1,307 万頭、猫 1,210 万匹、世帯飼育率はそれぞれ犬

19.4%、猫 14.9%に達している。（ペットフード工業会「犬猫飼育率全国調査」より¹⁾。図表 1 を参照）すなわち、全世帯のうち、少なくとも 5 軒に 1 軒の割合でペットを飼っている計算となる。また、飼育するペットの種類として、犬と猫を比較すると、2004 年から 2005 年に掛けて犬の飼育頭数は増加したが、猫の飼育頭数は微減した。

2. ペットビジネスの市場規模

総務省の家計調査における 1 世帯あたりの年間ペット支出は、1990 年の 7,884 円から、2004 年には 14,832 円と、ほぼ倍増した。同期間における年間の消費支出がほとんど変化していない事を踏まえると、ペットに対する支出をいとわない飼い主が増加していることが伺える。

この結果、ペットビジネスの規模は 1 兆 192 億円（前年比 101.2%）、うちペットフード 3,911 億円、ペット用品 1,148 億円、生体 1,148 億円、動物病院 2,621 億円、その他の関連サービス 837 億円といった規模に成長している（産経新聞メディクス「ペットビジネスハンドブック 2006」より²⁾）。

ペット市場のトレンド

1. ペット飼育のトレンド

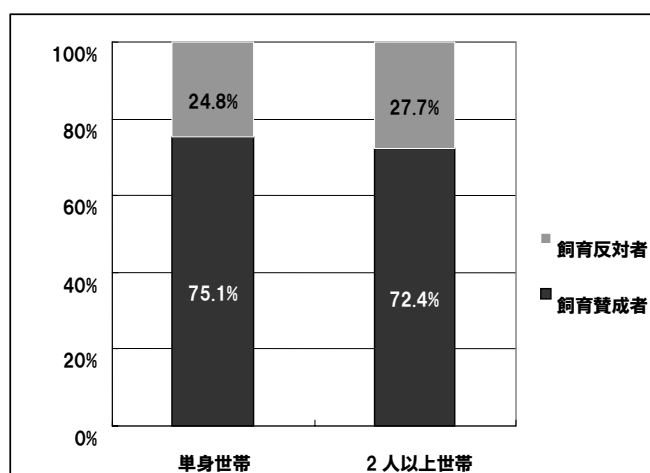
ペットを飼育する上でのトレンドに目を向けると、①伴侶化、②室内飼育、③小型化・純血化、④高齢化、という 4 つのトレンドが挙げられる。

伴侶化は、ペットを家族の一員として捉える飼い主の増加である。もはや飼い主にとって、自分のペットについて語る際、「うちの子」と呼ぶことに抵抗はない。また、ペット用の服を着せ、アクセサリで飾ることに喜びを感じる飼い主も多い。産業界においても、飼い主とペットという位置づけから、飼い主と生活を共にする動物との意味で「コンパニオン・アニマル」という呼び方に移っている。“エサ”と言わずに“ペットフード”という言い方をするのもその表れであろう。

2つ目のトレンドは、家の中でペットを飼育する飼い主の広がりである。とりわけ首都圏では、戸建住宅から集合住宅（マンション、アパート等）へと住居形態が変化し、屋外でペットを飼育することが物理的に困難なことから、加えて、家族の一員であるペットと一緒に暮らすことを前提とする飼い主が増加していることが背景としてあると言える。首都圏における 2005 年のペット同居可能なマンションの普及率は 64.3%（不動産経済研究所調べ³）に達している。

加えて、ペットの室内飼育に対する理解も拡大している。図表 2 は、集合住宅におけるペット飼育の賛否についての調査結果であるが、賛成とする割合が 7 割を超え、反対とする回答を大幅に上回っている。

図表 2. 集合住宅での犬猫飼育に関する賛否



出所：ペットフード工業会「犬猫飼育率全国調査」

このような実態を踏まえると、ペットの室内飼育は社会的にも認知されつつあると言え、今後も増加するであろうことは想像に難くない。

次稿に詳細を譲るが、伴侶化、室内飼育の動向を受け、ペットと一緒に時間を楽しむことをコンセプトとした商品やサービスが次々と提供されている。例えば、旅行・観光業においては、ペットとの同行を前提としたバック旅行や、ペットと一緒に宿泊できる施設の紹介・斡旋が増加している。

3つ目のトレンドは小型化・純血化である。捨て犬、捨て猫を拾ってきてペットとして飼育することは過去の物語となり、現在ではペットショップやブリーダーから購入する飼い主が多くを占める。その結果、いわゆる雑種から、血統書付きの純血種を飼育する飼い主が増加している。図表 1 から解かる通り、犬においては雑種犬の飼育頭数が 421 万頭であるのに対して、純粋犬は 885 万

頭と 2 倍以上の開きがある。

また、前述の室内飼育に呼応し、小型の犬種を選ぶ飼い主が増加している。人気のある犬種は、ミニチュアダックスフンド、チワワ、トイプードル、ヨークシャ・テリアなど、いずれも小型犬が占める⁴。

4つめのトレンドであるペットの高齢化については、ペットの健康や安全に対する飼い主の意識の高まりから、高齢化が進展しているととらえられる。ペットが伴侶であるがゆえに、健康に良い食事を与え、ペットの体調変化があればすぐに動物病院の診察を受けさせるという習慣が形成され、ペットが“健康化”している。

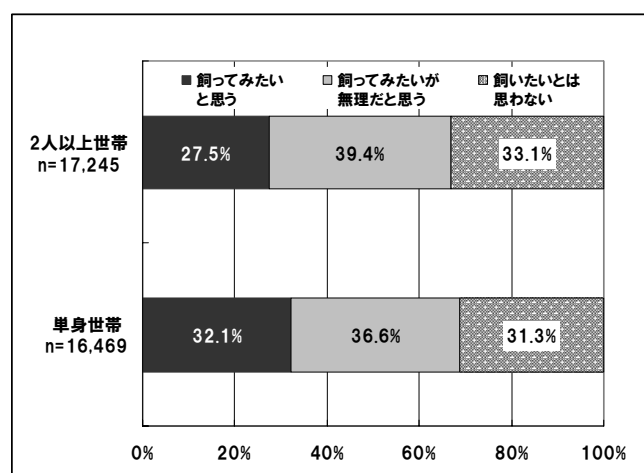
また、フィラリア症⁵の対策を行う飼い主の増加、室内飼育の増加によるペットの交通事故死の減少など、様々な要因がペットの寿命を延ばす結果につながっていると想定される。

次稿にて述べるが、こうした飼い主の動向を受け、24 時間の診療受付、MRI や精密検査などの体制を備えたペット向けの高度医療を行う病院も出現している。

2. ペット飼育の今後

ペットの飼育、とりわけ犬の飼育頭数は増加傾向にある。また、今後ペットの飼育を希望する消費者は 30% にのぼり、大きな潜在需要があると言える。したがって、今後しばらくの間、飼育頭数は増加が継続と予測される。

図表 3. 犬の飼育意向



犬の非飼育者を対象とした調査

出所：ペットフード工業会「犬猫飼育率全国調査」

このようなペットビジネス市場の概観を踏まえ、次号では参入企業の動向や将来展望について述べよう。

¹ 飼育頭数および世帯飼育率は 2005 年の値。

² 2004 年度の値。

³ 出所：2006 年 5 月 31 日付 建築通信新聞より

⁴ 出所：ジャパンケンネルクラブの 2005 年犬種別犬籍登録数より

⁵ 犬糸状虫とも呼ばれ、蚊を媒介し感染する内部寄生虫。